

『夢への挑戦』

「みんなで集まって合宿してきたかいがあった。」

リオデジャネイロパラリンピック男子陸上四百メートルリレー決勝で、銅メダルを獲得した日本選手団。第三走者である、多川知希選手は、こう語った。

「もう少しでメダルも見えてくる。大舞台で力を発揮できるようにしたい。」

そう悔しさをにじませたロンドンパラリンピック

クから、四年の年月が経過していた。

一九八六年に神奈川県で生まれた多川選手には、生まれつき右前腕部欠損という障害があった。しかし、小学校時代の多川選手は、右手のハンディを少しも気にせず、いつも友達とドッジボールなどをして遊んでいた。文字や数字を書くときには、右腕で紙を押さえ、左手に鉛筆をもちながら書いていた。鉄棒にも挑戦し、逆上がりなどの技ができるようになるまで、粘り強く努力をする子供だったという。



そんな多川選手が陸上競技に出会ったのは、中学生の頃だ。投てき種目である『ほう丸投げ』に取り組んだ。周囲はその姿に驚いた。腕に障害がある多川選手が、健常者の大会に出場して活躍していたのである。自分自身の可能性を信じ、自分自身を成長させるための挑戦を続ける日々が続いた。大学入学後も多川選手は陸上競技を続け、さらには、「障害者スポーツ」にも参加するようになった。海外の舞台も経験し、日本代表として華々しい選手生活を送ることが約束されていることを誰もが信じて疑わなかった。

しかし、二〇一〇年に、晴れて社会人チームに所属した多川選手を待ち受けていたのは、大きな「壁」だった。けがの影響に加えて、練習環境の変化などもあり、思い通りの結果が出せなくなってしまったのである。ここで終わってしまうのか、大好きな陸上競技をあきらめられるのか。多川選手は苦しみながら、自身と向き合う日々が続いた。

「初めて悔しさを覚えました。本気でやろうと決意しましたね。」

それから、再び健常者と一緒に練習をする多川選手の姿がグラウンドにあった。『ただ速く走りたい』と強く願う選手たち。そこには、健常者も障害者もなかった。『練習は嘘をつかない』ことを信じ、ひたすら厳しい練習に明け暮れる日々が続いた。いつしか、多川選手の「壁を越える挑戦」は、「夢への挑戦」へと、強く変わっていった。

見事、リオデジャネイロパラリンピックで銅メダルを獲得した多川選手。しかし、多川選手はまだその歩みを止めない。その視線の先には、二〇二〇年の東京パラリンピックがある。

「もっと伸びしろがある。」

多川選手の夢への挑戦はまだまだ終わらない。



写真提供：朝日新聞社／PPS 通信社